

「ソビエト語」の諸問題

—— 全体主義社会の言語に関する理論的考察の試み ——

高 橋 健一郎

1. はじめに

1990年代初頭のソ連邦の崩壊はロシアにおいて言語と社会の関係に対する関心を高める契機となった。その中で近年特に重要な研究領域の一つとなっているのは、ソビエトの「全体主義言語」、「ソビエト語」、「ニュースピーク」などと呼ばれる現象に関する研究である。この現象をどう定義するかは研究者によってまちまちだが、そこにある程度共通している認識は次のようなものであろう：「国家は言葉の意味を規定し、その用途をきめ、魔法の輪をつくる。ソビエト制度のなかで理解し理解されようとするならば、だれしもこの輪のなかに入らねばならないのである」（Геллер 1994: 263、邦訳：336）。ソ連という全体主義的な体制下の特殊な言葉・言語文化についての研究は、現在の学問的観点から次のような意義をもつと考えられる。

第一に、「ロシア学」においてはこの「ソビエト語」研究はもっと大きな枠組みである「全体主義文化」研究と連動している。例えば、最近目立ってきているのは「文化としてのスターリン時代」というアプローチ、つまり文化史的なプロセスの中に全体主義的なスターリン時代を位置づけようという考え方であるが¹、「ソビエト語」研究もその中に位置づけられるべきものでもある。

また「歴史学」の立場からは、国家とは社会制度、経済制度の変革のみによって成立するのではなく、言語を初めとする様々な記号の実践によって新し

¹ スターリン時代の文化に関する研究については沼野（1996）を参照。

い世界が構築され、その中に民衆が入りこんでいくことによって成立するという認識が出されてきた²。つまり、国民・国家の成立の研究においては、美学、記号論その他様々なアプローチが有効であるということであり、その意味において「全体主義言語」研究も国民や国家に関する問題系と密接に関わってくる。

最後に「言語科学」一般の立場から見てみると、我々がここで目にするのは、「コミュニケーション手段としての言語」あるいは「生得能力としての言語」などという視点ではまったく捉え切れない、社会や権力、イデオロギーと密接に関わる言語の姿であり、「言語学」すらもそこに複雑に関与しているという状況である。70年という長い間社会全体が特異なイデオロギーの影響下にあり、大量の文学、文献が特別な言葉で書かれ、その中で幾つもの世代が生まれ、教育を受けた国はほかにはない。その意味で、ソビエト全体主義言語という現象の研究は、言語自体のもつ政治性、そして言語と国家、言語と権力の関係などについて考えるための一般理論の基礎になり得るし、言語と社会の様々な関係を問う社会言語学にとっても極めて多くの示唆を与え得るに違いない。

「ソビエト語」に関する諸研究については拙論（高橋 2002 b）で、ロシアの社会言語学、社会学における統計的「内容分析」、批判的言語分析、社会史研究などに分類し、それぞれ整理した。本稿はそれを発展させながら、「ソビエト語」の基本的な構造を粗描し、また「ソビエト語」が孕んでいるさまざまな言語内的・言語外的諸問題を理論的に整理することを目的とする。

² 例えば、フランス革命の政治文化に関する Lynn Hunt の次のような言葉を参照：「フランス革命期の言語はたんに革命期の変化や闘争の現実を反映するだけではなく、むしろそれじたいが政治的・社会的変化の手段に変わった」（Hunt 1984: 24）。

2. 「スターリン言語学」とその批判

拙論（高橋 2002 b）で触れたように、革命という社会の大変動に伴う言語の変化については革命直後から多くの言語学者がさまざまな立場から論じていた。しかし、1950 年に『プラウダ』紙上で繰り広げられた言語学討論によって、この問題は転換点を迎えることになる。その討論の中でスターリンは次のように述べている：

ロシア社会とロシア語を例にとってみよう。最近の三〇年間に、ロシアでは古い資本主義的土台が根絶され、新しい社会主義的土台が建設された。これにおうじて、資本主義的土台のうえに立つ上部構造は根絶され、社会主義的土台に照応した新しい上部構造が作りだされた。したがって、古い政治的・法律的その他の機関は新しい社会主義的機関におきかえられた。だが、それにもかかわらず、ロシア語は基本的には十月革命前とおなじであった。この期間にロシア語ではなにがかわったか。ある程度ロシア語の語彙が変化した。〔……〕ロシア語の基礎をなすその基本的な単語のたくわえや文法構造についていえば、これらのものは、〔革命によって〕資本主義の土台が根絶されたのちも根絶されず、言語の新しい基本的な単語のたくわえや新しい文法構造でとりかえられなかったどころか、逆に、そっくりそのまま保持され、重大な変化はなにもうけずにのこった。まさに、現代ロシア語の基礎として保持されたのである。（田中 2000：185-186；強調引用者）。

これは、1930 年代半ば以降ソビエトの言語学で支配的であったニコライ・マル（Н.Я. Марр）の「言語に関する新学説」を否定する際に述べられたものである。1930-40 年代にはマル理論にスターリン自ら政治的支持を与えていたが、1950 年になって公式的に否定することになった。この言語学討論はこれまでもさまざまなところで論じられているが、「ソビエト語」という問題を考

える際に避けては通れない根本的な問題を孕んでおり、ここでその意味について簡単に考えておきたい。

マル理論は言語を上部構造と捉え、経済体制の発展に従って言語が変化するとし、言語の「階級性」を主張するものであった。「言語は階級的である」というテーゼはマルの主張によれば、民族に共通言語はなく、階級対立を反映して「ブルジョア言語」と「プロレタリア言語」があるというものであり、それに従うと同一民族の異なる階級言語の間よりも、異民族であっても同じ階級の言語のほうが類縁性をもつということになる。

スターリンの主張の眼目の一つはこの「言語の階級性」を否定することにあるが、もう一度スターリンの主張を見てみよう：「ロシア語の基礎をなすその基本的な単語のたくわえや文法構造についていえば、これらのものは、[革命によって] 資本主義の土台が根絶されたのちも根絶されず、言語の新しい基本的な単語のたくわえや新しい文法構造でとりかえられなかったどころか、逆に、そっくりそのまま保持され、重大な変化はなにもうけずにのこった」(*ibid.*)。ここから分かるように、スターリンがマルの言語階級説を批判する際に示す言語観は「言語における主要なものは、その文法構造と基本的な単語のたくわえ」であり、「交通の手段・道具」であるというものである。その当然の帰結として「交通手段としての言語は、いつでも、社会にとっては単一の、社会の成員にとっては共通な言語であったし、今もそうである」(*ibid.*: 205) と主張される。そして「言語はいかなる意味でも階級的ではない」というテーゼを擁護するため、スターリンは言語概念を極限まで縮小し、あくまでも「全人民的な均一の語彙と文法の体系」としての言語のみを前面に出したのである。こうして、マルの理解による歪んだ「言語の階級性」が批判されると同時に、ソビエト言語学においては、言語の多様性、社会的方言などの研究までもが否定されてしまい、社会言語学的研究への一種の拒否反応が1950年代の一時期支配することになる³。

³ この状況に変化が訪れるのは1961年の第二次スターリン批判後である。1962年にソ連科

「社会体制が変わってもロシア語は変化しなかった」というスターリンのテーゼは、ラングのみを対象とする「言語学」の観点からは至極当然のものであろう。では、「全体主義言語」や「ソビエト語」などは、どのような問題として捉えるべきなのだろうか。その手がかりとして、このスターリン論文への感想として書かれた時枝誠記の「スターリン『言語学におけるマルクス主義』に關して」（1950年）という論文の一部を見てみよう。

[スターリン]氏が、言語は単一であるというのは、専らその言語の基本的語彙と文法的構造の同一であることをよりどころとしているのである。もしこの論理が許されるならば、すべての日本画は、線と色彩を同じように用いることによって皆同一であるということが出来る筈である。このようにして、我々は、民族には単一の言語しか存在し得ないとして、安住していることが出来るであろうか。[……]日本の場合を例にとって見ても、平安時代の源氏物語や枕草子の言語が、宮廷サロンに属するこれら作者の物の考え方や感情を反映して、当時の庶民階級の言語とは異なったものであったらうということは十分想像しえるところであろう。ス氏に従って、これを日本語として同一であると云っても、それは何等問題の解明にならないのである。

（時枝 1976：227-228；旧漢字と旧仮名遣いを現代式に改めた）

これは、「言葉が違う」というときに、語彙や文法構造などの言語の個々の要

学アカデミーロシア語研究所の研究計画に「ロシア語とソビエト社会」というテーマが登録され、1968年にはその成果である『ロシア語とソビエト社会』という4巻本の記念碑的研究が完成し、「スターリン言語学」によって排除されてしまっていた社会的方言への関心が甦ってきたのである。その後、新聞やラジオなどジャーナリズムの言語の分析、話し言葉の研究など、様々なジャンルのディスコースの特質を探るという、ロシア言語学が誇り得る社会言語学的研究が盛んになっていった。これらの研究では、ソビエト社会におけるロシア語の語彙や文法、発音などの変化、そして言語の様々な社会的変種が詳細に分析されており、そこには下で見るような批判的なソビエト語研究という視点は見られないが、各時代の実際の言語使用の貴重な記録ともなっており、現在でも「ソビエト語」研究にとって価値を持ち得るものである。

素ではなく、それらを構成要素として成立する「作品」、つまり「ディスコース」のレベルで考える必要があるということである。そしてその作品は「物の考え方や感情を反映する」ものであり、そのレベルにこそ「変化」が現れるということである。例えば、ナチス政権下のドイツの言語が日に日に変化していく様子をユダヤ人言語学者の目で生々しく記述する『第三帝国の言語<LTI>』（クレムペラー 1974）を読むだけでも、「全体主義」とは一種の言語体系であることが分かるが、「ソビエト語」もまたソビエト共産党の公的イデオロギーを反映した言語体系なのだ。

しかし、「ソビエト語」をめぐる問いはそれで終わりではない。時枝は1955年に出版された『國語學原論 續篇——言語過程説の成立とその展開——』の中でも同様のテーマに触れ、次のように述べている：

近世末期から明治へかけて、日本の政治、社会、文化が全面的に変動した。

しかし、それらの変動は、決して、言語の分析的な構成要素である音韻、語彙、文法に影響をもたらしたとは考えられない。勿論、語彙の面では、新しい文明文化の流入とともに、多くの新造語が、生まれたという点が指摘されるけれども、その他の点で、言語が、この大変動期を反映したという事実を指摘することは、困難である。言語が、影響を受けたのは、やはり、言語生活の体系においてである。例えば、

一、活版印刷術の普及によって、従来の木版印刷術の時代に比して、一般の人々の読む生活は、その量において、比較にならないほどに、拡大された。

二、自由民権思想、議会制度の発達に伴って、次第に一般の人々が、言語を以て、政治に関与する道が開かれ、日常の音声言語に、新に、演説、弁論、討議というような新しい言語形態を分化発達させることになった。

三、国家意識、社会意識の発達によって、各人が、国家或いは社会の構成員としての活動の面が多くなるにつれて、対隣人、対郷土人のみの方言生活の外に、標準語による生活の必要が感ぜられるようになり、教育において

も、それに即応して、標準語教育が、国語教育の中心とされるようになった。

四、ラジオが普及し、街頭録音、放送討論会、「私たちの言葉」（一般民衆の声を反映させる放送番組）等によって、多くの人々が、その喜びや悲しみや、感想、意見、不平、要求等を表明する機会が与えられるようになったことは、話す行為に対する新しい刺激であって、それは、対個人的な、或いは一方的な意見や感想の発表と異なった、大衆に呼びかけ、また、呼びかけられる言語形態を生み出す契機となった。

五、政治が多数によって行われるようになると、世論の喚起、あるいは煽動ということが必要になる。また、資本主義下の商業戦は、簡明直裁に大衆の心理に訴えることが必要になり、ここに、スローガンや、プラカードや、新聞広告のための新しい表現形式が生まれるようになる。

[……] 言語史の時代区画ということは、言語の史的事実を、要素史的に扱ったのでは不可能なことであって、言語生活の体系において考察することによって、始めて可能となると同時に、政治、社会、文化との交渉も、それによって考えることが出来ることとなるのである。」（時枝 1955：198-200；強調引用者）

ここでは「思想が反映された言語作品」というだけではなく、さらに「言語生活の体系」全体にまで話が及んでいる。つまり、印刷術やラジオなどという技術、メディアの変化に伴う言語形態やコミュニケーション体系の変化、政治の要請などによる新しいことばのジャンルの発達など、社会、政治、文化的諸環境の変化と言語生活の体系の変化の相関関係が論じられている。

このように、1950 年の時枝論文では「思想の表れとしてのディスコース」という視点があり、55 年論文ではそれに加えて「ディスコース」が生み出される社会的・文化的コンテクスト、そして「ジャンル」という視点が打ち出されている点が「ソビエト語」の問題にとっても有益な視点だと思われる。

このような点を踏まえ、本稿ではまずソビエト・イデオロギーの表れとして

の「ソビエト語」の内的構造を明らかにし、さまざまな問題をそこでまとめることにしよう。そして、次に実際のソビエトの「言語生活」がどういうものかを考えることにしたい。

3. 「ニュースピーク」としての「ソビエト語」

まず、ソビエトの公的イデオロギーを反映した言語としての「ソビエト語」の内的構造を明らかにすることにしよう。

3.1 ニュースピーク

スターリン論文が社会から言語を引き離し、言語学の脱イデオロギー化を図ったちょうどその頃、まさに言語とイデオロギー、言語と全体主義という問題を前面に押し出し、そして現在の種々の「ソビエト語」研究の基礎となった小説が生まれていた。それは1949年にジョージ・オーウェルによって書かれたアンチ・ユートピア小説『1984年』である。この小説にはオセアニアという全体主義国家が描かれているが、そこではイングソック（イギリス社会主義）のイデオロギー的要求に応えるため、つまり独立した思考を廃止し、人々が異端的な思考を表現したり、あるいはそもそも考えつくことができないようにするため、「ニュースピーク」（Newspeak）と呼ばれる言葉が人工的に作られられる。

ニュースピークの全般的な目標が思想の範囲を縮めることだということが分からないのか？最終的には思想犯罪も文字通り不可能にしてしまうんだ。そうした思想を表現する言葉が存在しなくなるんだから。[……] 年毎に単語は漸減していくし、意識の範囲も絶えず縮小されていく。[……] 言語が完全なものになったとき、革命は完成する。ニュースピークはイングソックであり、イングソックはニュースピークなのだ。（Orwell 1992 [1949]: 55）

登場人物が語る「ニュースピーク」に関するこの言葉の根底には、国家が言葉の意味を支配して国民の思考をイデオロギー的にコントロールするという考え方が存在する。つまり、国家権力が語彙を制限したり、その意味を都合のよいものだけに限定するという言語操作を施し、国民はそれによって、国家に都合のよいようにしか思考することができなくなるというのである。この前提にあるのは、言語が人の思考や経験の仕方それ自体を決定するような作用を備えていると考える「言語決定論」、そしてマス・メディアが直接民衆に作用するという社会学的「皮下注射理論」である。前者によれば、言語使用者は「本当の現実世界」をそのまま経験するのではなく、すでに言語のフィルター（ヴァイスゲルバーの用語によれば「言語的中間世界」）を通過したものを知覚するが、言語が権力集団によって支配されるのであれば、その支配された言語によってイデオロギー的にゆがめられた現実を人々は見ることになる。また、後者によれば、権力の言葉が民衆に注射されるかのごとく自動的に浸透するということになる。

「ソビエト語」研究の多くもまたこのような言語観を程度の差こそあれ共有している。例えば、オーウェルの描くニュースピークとソビエト語、ナチス・ドイツの言語、中国共産党の言語などを比較するヤングは「共産党は人々に公式イデオロギーと完全に合致した見地や考え方を押し付けるために語彙を用いるという意味で、ニュースピークの精神に忠実であった」（Young 1991: 206）と言う。また、ロシアで「ソビエト語」に関する学術的研究が一気に盛んになったのは、ペレストロイカ・グラスノスチ政策が進んだ1989年にこの『1984年』の翻訳が公刊されてからのことである。ミヘーエフ（Михеев 1991）によれば、1989年末から1990年初めにかけて、モスクワ国立大学のジャーナリズム学部で「全体主義社会の言語」というセミナーが開かれ、1991年4月には「言語と権力、権力の諸言語」というシンポジウムがソ連のリトアニアで開催されるに至り、「ニュースピーク」としての「ソビエト語」研究が盛んになっていった。

では、「ニュースピーク」としての「ソビエト語」は、いったい「普通のロ

シア語」とどのように異なるのか。言語学者クロンガウスは、「ソビエト語」は音声学的にも形態論的にも統語論的にも日常言語とは区別され、ソ連社会には「日常言語」と「ソビエト語」の一種のダイグロシヤ（二言語併用状態）が生み出されたと主張する（Кронгауз 1994）。クロンガウスの主張は1970年代以降の「成熟した社会主義の時代」に関するものであり、「ダイグロシヤ」論がソビエトのすべての時期に適用可能かという点は議論の余地があるにしても、「ソビエト語」を一つの「言語体系」とみなして、その内的構造を明らかにすることはアプローチの一つとして十分可能であろう。先行研究にも触れながら、ニュースピークとしての「ソビエト語」の基本構造を明らかにしていこう。

3.2 「ソビエト語」の物語：元^{アーキタイプ}型とプロット

「ソビエト語」の内的構造の記述は、言語学的に個々の語彙や文法の記述を積み重ねていくよりも、むしろ「物語」を基本レベルにおいて記号論的に問題設定をした上で行う方が有効だろう。ソビエト社会が「共産主義の達成」という明確な最終目標とそれに基づいた「善悪二元論」のパトスを持ち、そのために宣伝煽動活動を生活の中に浸透させる社会であったことを考えれば、そこで具体的に展開される言説が一定のパターンを有するものとなるであろうことは容易に想像できるからであり、また「ソビエト語」が民衆に定着するプロセスとは、辞書の単語の語義を一つ一つ書き換えることによってなされるのではなく、現実世界についての具体的な「物語」が日常的に人々に浴びせかけられることによって遂行されていくからである。従来の多くの「ソビエト語」研究で論じられてきた個々の語の意味変化や修辞技法なども、「物語の分析」という問題圏に取り込むことができるし、むしろ取り込まれるべきだと思われる⁴。

⁴ 例えば、ナチスの言語の「嘘」についての次のような記述を参照：「だが、語彙が人をあざむく事があるというのは、一体どうして起るのであろうか。[……] 人がいかなる文脈限定ももたずに考える語彙は、あざむく事がない」（ヴァインリヒ1973：56-58）。ヴァ

その分析の出発点として、ここでは簡単に「ソビエト語」の典型的な物語の構造を粗描するが、まずはユング心理学に依拠しながらソビエト文化の「元型」を想定する H. ギュンターの論文を参照することからはじめ、そしてそのような物語の「素材」をもとにして展開される物語の基本的なプロットをウラジーミル・プロップ流の構造分析によってまとめてみよう。

3.2.1 「ソビエト語」の世界の「元型」と「大家族神話」

H. ギュンターの論文「ソビエト文化の元型」（Гюнтер 2000）によれば、ソビエト文化の元型としては〈英雄〉・〈敵〉・〈賢き父〉・〈母〉を想定するのが妥当であると考えられる。ギュンターによれば、ソビエト文化の元型の形成は次のような過程を経て行われた。1920年代は英雄神話が支配的であり、そこでは平等な兄弟関係が中心となるが、しかしレーニンという親を失った兄弟たちの中からスターリンという「長兄」そして「父親」が出てくる。そして、集団化のカオスの中から、「祖国」という形象として現れることの多い「グレートマザー」の元型が、安定化の要素として生まれる。こうして1930年代半ばまでにソビエト文化の深層構造には、〈父親〉、〈母なる祖国〉、英雄的〈息子と娘たち〉という「大家族」⁵が形成され、そして同時にこの大家族をつねに脅かす〈敵〉の元型が存在していた。

インリヒの説明によれば、例えば「血」と「大地」という2つの語自体は人を欺かない。しかし、「血と大地」と結ぶと、この2つの語が互いに文脈を与え合うためにナチス的な考えに向かって意味が限定されてしまうのだ（*ibid.*）。ここでヴァインリヒがいう「文脈」とはテキスト内の文脈のことだが、しかしもちろん「テキスト外」の社会的・文化的文脈もここでいう「物語の分析」には含まれるべきだと考える。つまり、本稿で言う「物語の分析」とは、狭義の構造主義的ナラトロジー（のみ）ではなく、社会的・文化的文脈の考察も含んだものとならなければならない。

⁵ カテリーナ・クラークによれば、このような「家族」のシンボリックな雛型は、初期の革命の教義の中だけに求められるものではなく、血縁関係を持たない者を受け入れながら家族集団を拡大し、農村共同体を築き上げた伝統的なロシア農民の家族の社会的組織自体にも求められると言う。一般に人類学では「大家族」と「小家族」を区別するが、この対立は1930年代の理想となり、実際1940年ごろまでには個々の家族とソビエト社会全体の関係が「小家族」と「大家族」の関係と見なされるようになっていた（Clark 2000: 785）。

クラークによれば、この「大家族神話」が成立したのは、ソビエトのレトリックにおいて1931年頃から象徴系が変化したことと関係がある（Кларк 2000: 786）。20年代末からの第1次5ヵ年計画の時期には「機械」のメタファーがソビエトの政治レトリックの中で支配的であり、人は国家という「機械」の「ネジ」と捉えられていたのに対し、1930年に入って次第に「機械」のメタファーは力を失い、30年代半ばまでには「良い指導者や組織者」、つまり「人間」に関心が移っていく。このような状況の下で成立する「ソビエト大家族神話」は、労働生産性向上の運動や極地探検その他において〈英雄〉が数多く生み出される出来事と結びつきながら、スターリニズムのレトリックの根本となるのである。

このような「ソビエト大家族神話」を中心に持ちながら、「ソビエト語」の物語は具体的にどのようなプロットをとるのだろうか。これらの四つの元型は実際にすべて重要なものだったが、多くの語りの中で典型的に現れるのは〈英雄〉と〈敵〉の形象であった。英雄の元型が個人の発達の初めの段階であるのと同様に社会集団においてもそうであり、また成長過程で統合されなかった「影」の元型が他者に投影されるが故に「敵」の元型が必然的に現れざるを得ないという、ユング的な説明（Гюнтер 2000: 744-755）が妥当か否かは別として、「大衆が英雄と同一化し、英雄を真似ることが、国家的課題遂行の勤めとされ」（*ibid.*: 749）⁶、「1930年代後半には敵がほとんど主人公となり」（*ibid.*: 755）、新聞雑誌で語られる「あらゆる出来事が英雄たちの輝かしい勝利と妨害者たちの邪悪な陰謀との二つのカテゴリーに分けられる」（*ibid.*: 751）というのは紛れもない事実である。つまり、英雄の形象を作り上げて大衆を同一化させるという《教育の物語》と、英雄と敵との《闘争の物語》が、

⁶ この点に関してはガブリエル・タルドの群集論を参照してもよい。互いに異質である人間が集まって社会が成立する際の結合の法則をタルドは「模倣の法則」と呼ぶ。それは称賛という情念を動力として「手本」を模倣し、それに同化するということである。手本になる人物は卓越しており、威信に満ち、大衆はそうした卓越した個人の威信に魅惑され、それに同化しようとするのである。タルドの群集論に関しては、タルド（1924）を参照。

物語の最も基本的なパターンとして考えられるということである。

3.2.2 物語構造を規定する規則

以上のように、「ソビエト語」の基本的な語りは、〈英雄〉が成長し、また〈敵〉と闘うというパターンにまとめられるのだが、しかしその語りは民話と同様に必ず一定の結論にしか至らない。例えば、英雄と敵の闘争の結果、決して英雄が敵に負けることはないし、指導者スターリンが過ちを犯すこともない。これは、〈英雄〉や〈敵〉といった「登場人物」たちの「行為」だけではなく、登場人物の特徴づけに関しても同じことが言える。

そのような物語上の制限の規則の根底にあるのは、善悪の対立に基づいた極めた単純なものである。それによれば、プラスの価値を帯びる名詞にはプラスの価値を持つ形容詞しか結びつかず、マイナスの価値をもつ名詞にはマイナスの価値を持つ形容詞しか結びつかないのが基本である。例えば「レーニン」という名詞は「偉大な」という形容詞とは結びついても、決して「臆病な」という形容詞とは結びつかないのである。これは非常に厳格な規則であるがゆえに、「ソビエト語」では「偉大なレーニン」「偉大な十月革命」「不滅の偉業」「卑劣な資本主義」など一連の「枕詞（常套形容語）」が定着することになった⁷。

⁷ 例えば、Левин (1999) が挙げている、スローガンで用いられる「枕詞」の例を参照。またこの問題は、名詞と形容詞の結びつきに関する「選択制限」という言語学の一般的な問題に他ならない。例えば、

a) Mary hopes to meet an eligible bachelor.

(メアリーは望ましい独身男性にめぐり会いたいと思っている。)

b) * Fred hopes to meet an eligible spinster.

(フレッドは望ましい独身女性にめぐり会いたいと思っている。)

という2つの英語の例文のうち、a) は普通に用いられるのに対して、b) は「不適切」とされる。このような非対称はいわゆる「成分分析」からは説明がつかず、社会通念において未婚であることが男性と女性とで意味合いが異なるという点に求められるものとしてしばしば言語学で引きあいに出される例である (Lakoff 1975: 32ff.)。この例からも分かるように、一般に意味やカテゴリーは人間の社会的な通念や知識構造に照らし合わせてその価値を得るものであると言え、「ソビエト語」という特殊な言語世界の場合は、その「社

同様に、動作主とその動作や状態、また動作動詞とそれの修飾語としての副詞などの結びつきなどすべてがこの「善悪」の対立の原理に支配され、制約を受けることになる。例えば、“Colorless green ideas sleep furiously.”（「無色で緑色の観念はすさまじく眠る。」）が「文法的だが無意味」（チョムスキー）なのと同じくらい、「臆病なレーニンが愚かにもしくじった。」という文は「ソビエト語」としては「無意味」であり「不可能」なのである。

つまり、「ソビエト語」の原理に基づく多くの発話は、「善なる〈英雄〉が善なることを行い」、「悪なる〈敵〉が悪なることを行う」という2つのトートロジー的大命題を延々と繰り返すことによって成り立っている。例えば、「レーニン」や「社会主義」、「労働者階級」などの絶対的「善」の語彙から出発し、それを再三演繹することによって、「われらは良い」という命題に到達し、逆に「トロツキスト」や「資本主義」などの「悪」からは「敵は悪い」という命題に行きつくのだ⁸。

では、このような構成原理に基づいた具体的な物語構造を図式化してみることにしよう。

3.2.3 《教育の物語》

《教育の物語》とは、〈英雄〉の輝かしい勝利について述べ、そしてそれに一般大衆が追随することを目的とするようなタイプが典型的である。ここで言う〈英雄〉とは、通常「英雄的な労働者」がその位置に立つが、時にはレーニンやスターリンなどの政治指導者がその位置に来ることもある。また、A.ロマネンコによれば、〈英雄〉—〈敵〉という対立だけではなく、ソビエトの言語文化の中にはそのどちらの立場にもつくことのできるような〈中間層〉とでも呼ぶべき形象が存在する⁹。これは、今は必ずしも〈敵〉ではないが、「落伍者」

会的通念や知識構造」が上記のような厳密な善悪二元論に基づいているということである。

⁸ 言語学者 G. リーチによるプロパガンダ言語の分析の例を参照 (Leech 1974: 58ff.)。

⁹ Романенко (2000: 75-83) を参照。ロマネンコの用語では「不明者」である。

だったり「怠け者」だったりして肯定的な評価を得られない者たちである。彼らが〈敵〉となるのを未然に防ぎ、〈英雄〉となるようにすることもソビエト社会の一つの重要なテーマであり、《教育の物語》はそのようなテーマも含むことになる。

このようなタイプの物語は、与えられた課題を解決していくという側面に焦点が当てられた語りとなることが多い。ソビエトの社会主義リアリズム小説を分析したアメリカのロシア文学者 K. クラークは、ソビエト小説では主人公が「意識」（自覚）を獲得する旅に出発し、途中でしばしばより自覚的な〈援助者〉（ギンター＝ユングの〈賢き父親〉に相当）の支援のもとに様々な試練を乗り越えながら、最後には目的を達成するという、「通過儀礼」の物語が典型例だとする（Clark 1985: 167）。「通過儀礼」は単に小説というフィクションにのみ特徴的なのではなく、さまざまなメディアを通して語られる現実世界の〈英雄〉についての語りにも特徴的であったし（McCannon 1998: 103）、また通過儀礼自体がソビエト文化全体に浸透したものであった¹⁰。

このような「通過儀礼」の語りが社会主義リアリズム小説で展開されるとき、の典型的なプロットを、クラークの図式を簡略化して示すと次のようになる（Clark 1985: 256-260）。

1) プロローグ（「別離」）

主人公がある集団へと到着する。

2) 課題の設定

主人公は集団の状態がよくないことを知る。状態を改善するための計画を練り、それを提案するが、地元の人間に否定される。主人公は人々を集め、自分の案を指示するよう訴え、支持者を得る。

3) 経過（試練など）

主人公の計画が実施される。一連の障害に活動が妨げられる。障害は一般

¹⁰ ソビエト文化のさまざまな「通過儀礼」を分析した Глебкин (1998) を参照。

に次の二つのタイプをとる：

- i) 平凡な障害：糧食、人手、施設等の問題、官僚の不敗や怠慢、労働者の無関心、不平など。
- ii) 劇的な障害：自然災害、敵の侵攻、階級の敵、反革命テロリスト、敵対的官僚との闘いなど。

主人公の恋愛生活に問題が生じ、感情のコントロールが難しくなる。より権威のある人物の支援を求めてモスクワか地方の中心部に向けて旅に出る。

4) クライマックス（課題の遂行が脅かされる）

劇的な障害によって主人公の課題が遂行不能の状態になる。劇的な障害との遭遇の過程において人が死に、しばしばその事件に主人公も巻き込まれる。主人公は自己懷疑に襲われる。

5) 加入礼（イニシエーション）

主人公は援助者と話し合い、課題続行の力を得る。

6) フィナーレ（加入の祝い）

課題は達成され、達成を祝う儀式がある。恋愛問題が解決され、主人公は利己的な自己を克服し、個人を超えたアイデンティティを獲得する。クライマックスで殺された犠牲者を悼む葬儀が行われる。

この図式は文学作品のみならず、多くの「日常的な」語りにも適用可能だが、ただし、文学作品以外のあらゆるジャンルに共通するようなプロットしてはもっと単純な構造を想定した方がよい。ここでは《教育の物語》のプロットとして次のようなものを提示しよう。

1) 【課題の設定】

課題が設定される。〈英雄〉が課題解決に取り組む。

2) 【経過（試練など）】

〈英雄〉の計画が実施される。一連の障害に活動が妨げられる。しば

しば障害を与える〈敵〉との【闘争】が行われる（《闘争の物語》）。

3) 【援助】

〈指導者〉や〈援助者〉の援助により、〈英雄〉は課題解決を続行する。

4) 【課題の達成】

課題が達成される。あるいは、達成が祈願される。

5) 【前進】

〈英雄〉がさらに究極目標に向かって前進していく。「道」や「建築物」などのメタファーにより、さらなる目標が設定される。

ソ連社会では「共産主義の達成」という究極的目標に向かって次から次へとさまざまなレベルで「課題」が提示された。課題提示の役割を果たしていたのは、主としてスターリンをはじめとする指導者の演説や論文、そしてスローガンなどの呼びかけなどであり、その具体的な解決例がさまざまなメディアを通して展開されていた。その多くがこのタイプの語りである。

3.2.4 《闘争の物語》

《闘争の物語》は基本的には《教育の物語》と同様の構造を持ち、《教育の物語》の図式の中に組み込むことも（あるいはその逆も）可能であるが、《教育の物語》では英雄の「成長」あるいは「活動の成果」に重点が置かれるのに対して、《闘争の物語》では「敵との闘争」そのものに焦点が当てられることが多いという相違がある。もっぱら〈敵〉との闘争のみに焦点を当てた語りも多数存在することから、ここでは《教育の物語》とは別に《闘争の物語》のプロットを提示することにしよう。

ここで言う〈敵〉とは必ずしもマルクス主義理論における階級闘争の敵ではなく、もっと一般的な概念であり、もともとは「悪魔」や「サタン」というイメージをまとった語である（Шлыстов 1992）。そして、「ソビエト語」の〈敵〉は大きく分けると、ファシズムに代表されるような外部の残虐な敵（〈敵1〉）と、トロツキストたちに代表されるような内部の仮面をかぶった敵（〈敵2〉）に分けられる。そして、それぞれのタイプとの【闘争】は次のように図式化する

ることができる¹¹。

《闘争の物語1》(〈敵1〉との闘争)

1) 【被害】

〈敵〉により〈犠牲者〉が被害を受ける。〈敵〉と〈犠牲者〉の間の不均衡な力関係が強調されることが多い。〈英雄〉が〈犠牲者〉と同一の場合も、そうでない場合もある。

2) 【援助】

〈英雄〉が〈指導者〉や〈援助者〉の援助を受ける。

3) 【闘争】

〈英雄〉と〈敵〉が闘争する。

4) 【勝利】

〈英雄〉が勝利を収める。

5) 【前進】

〈英雄〉がさらに究極目標に向かって前進していく。「道」や「建築物」などのメタファーにより、さらなる目標が設定される。

《闘争の物語2》(〈敵2〉との闘争)

1) 【誘惑】

仮面を被った〈敵〉が〈犠牲者〉(=〈中間層〉)をそそのかす。

2) 【援助】

〈指導者〉または〈英雄〉が敵の姿を暴き、〈犠牲者〉を助ける。

3) 【闘争】

〈英雄〉が〈敵〉と闘争する。

4) 【勝利】

〈英雄〉が勝利を収める。

5) 【勧告】

仮面を被った〈敵〉の正体を暴くよう勧告する。

¹¹ 《闘争の物語1》に関しては、1920年代の『プラウダ』の社説を分析した拙論(高橋1998a)を参照。

4. 「ソビエト語」の言語学

すでに述べたように、「ソビエト語」の記述の一つの方法は、テキストのマクロ構造を規定した上で、下位レベル（シンタクス・語彙など）の分析をそこに取り込んでいくというものである。ここでは、これまでのさまざまな「ソビエト語」研究で論じられてきたいろいろなレベルの言語学的問題について、代表的な先行研究に触れながら、簡単にまとめておこう。

4.1 語彙

上で触れた「スターリン論文」の中でも認められているように、語彙は最も変化を受けやすい言語単位であり、「ソビエト語」研究で最もポピュラーなテーマである。ソビエト時代のロシア語の意味変化について触れた研究は枚挙に暇がないが、主要なものには、ペレストロイカ期からソ連崩壊期という激変する社会的コンテクストの中でいくつかの単語がどのように使われたかを記した Левонтина (1995) や、所有権の意味をもつ動詞について論じた Розина (1996)、「同志」などの呼びかけ表現の変化を扱った Кронгауз (1995) などのほか、体系的に辞書形式でソ連社会に特有の語彙、イデオロギー的意味を担った語彙を記述した Hodgkinson (1954)、Земцов (1985)、Сарнов (2002) などがある。特筆すべきは、1995年にナターリア・クーピナによって書かれた『全体主義言語』(Купина 1995) と1998年にペテルブルクで出されたモキエンコとニキーチナによる『ソビエト語詳解辞典』(Мокиенко, Никитина 1998) である。前者は、スターリン時代に出版されたソビエト最初のロシア語辞書であるウシャコフ編纂の『ロシア語詳解辞典』を主要な資料として、イデオロギー素たる語彙を網羅的に分析する¹²。また、後者にはソビエト

¹² クーピナの著作ではこのようなソビエト国家の公式的な言語のみならず、それに対抗して存在した「アンチ全体主義言語」も扱われており、例えば、第3章では強制収容所の詩やアネクドートなどの分析を通して、第1、2章で明らかにされた全体主義言語が崩

時代の単語、イディオム、諺、アフォリズムその他が相当数収録されており、それぞれに語彙論・辞書編纂学の知見を生かした記述が加えられ、700 頁にも及ぶ大著となっている。

さらに、ソビエト語の「イデオロギー素」である語彙の同義・反義関係の記述から、ソビエト語全体を貫く論理構造を鮮やかに分析してみせる Epstein (1995) も興味深い。そこで示されるのは、全体主義的な思考においてはあらゆる対立が決して最終的なジンテーゼへと到達せずに、右から左へ移ったり元に戻ったりと、常に自己構築と自己破壊のプロセスの中にのみ存在し、本質的に何も新しいものを生み出すことなく、つねに循環し、対立する思想をもそこに飲み込んでいくものであるということである。

4.2 文法・テキスト

ヴァイスは様相論理学で言うところの「普遍量化子（「あらゆる」「すべての」など）／存在量化子（「ある種の」「或る」など）」と「必然性／可能性」という二つの対立について興味深い分析をしている。一般的に普遍量化子は「われら」の指標となり、存在量化子は「かれら＝敵」の指標となりやすいということはよく指摘されるが¹³、これについてヴァイスは「必然性／可能性」という対立をそれに重ね合わせて論じる。「ソビエト語」では義務のモダリティーを表す表現が非常に多用され、「…しなければならない」のは基本的に「かれら」ではなく「われら」であるが、その理由の一つとしてヴァイスは、様相論理学における様相演算子と量化子の間の関係を挙げる。つまり、もし P が「必然的」であるならば、P は「すべての」可能世界において真であるのに対し、もし P が単に「可能」であるならば、それは P が真である可能世界が少

されていく様子が示されている。「アンチ全体主義言語」という問題は本稿の範囲外ではあるが、Вежбицкая (1993)、Кронгауз (1996)、Купина (1999) など重要な研究も存在し、一つの重要な研究分野となっていることを指摘しておこう。

¹³ 例えば、ロマネンコは「不明者」（中間層）を名指す時に多用される存在量化子の代名詞を「言語シグナル」としていくつか挙げている（Романенко 2000: 83）。

なくとも「一つ」存在するということであり、これは言語学のレベルでも同じであることを考えると、「普遍量子子／存在量子子」という対立が「必然性／可能性」という対立と結びつくのは自然ということになる（Вайсс 2000: 549-552）。

語彙を超えて文体その他のレベルに及ぶ研究も多い。ソビエト語の語彙や文法などの一般的な諸特徴を簡潔にまとめた Басовская (1995)、Sinyavsky (1990)、トマルキン (1994) をはじめとして、スターリンの演説の文体分析である Розина (1991)、Архипов (1997)、Вайскопф (2001) や、ソビエト期のテキスト生成の特質を論じた Радзиевская (1996) などを挙げるにとどめよう。また、特定のジャンルの分析も存在する。スローガンをその構造や機能などにより分類し、さらに語用論的な側面も扱った Левин (1998)、Алтунян (1999)、高橋 (2001)、スターリン時代の「聖典」であった『共産党史・小教程』のテキストをナラトロジーの立場から分析した ГЛОВИНСКИЙ (1996) その他がある。

4.3 機能

「言語はその多様な機能のすべてについて研究されなければならない」(Jakobson 1964 [1960]: 353) のであり、「ソビエト語」の記述の際もその「機能」を考慮することは必要不可欠である。言葉の伝達機能はさまざまなものがあり得るが、ここでは最も良く知られた R. ヤコブソンの六機能図式に従って「ソビエト語」の機能について考えてみたい。

ヤコブソンが挙げる六つの機能（関說的、情動的、動能的、交話的、メタ言語的、詩的）のうち¹⁴、情報伝達を主目的とする「関說的機能」、発話者の感情や態度を表現することを志向する「情動的機能」、また命令や依頼などのように相手の行動や態度に影響を及ぼそうとするような「動能的機能」は、多くの言語メッセージにおいて基本となる機能であり、特に触れる必要はないだろ

¹⁴ ヤコブソンの6機能図式は、Jakobson (1964 [1960]) を参照。

う。それに対して、若干の説明を要するのは残りの三つの機能である。

「交話的機能」とは、コミュニケーションの接触を志向するものであり、メッセージの内容よりもコミュニケーションが成立すること自体を目指す働きである。つまり、そこで重要なのは、何を言うかというよりも、とにかく何かを言うという事実である。クロンガウスが1970年代のソ連の言語について論じた「成熟した社会主義の時代における言語の無力」(Кронгауз 1994)の中で、言語の「儀式化」の例の一つとして挙げている A. ガーリチの歌の歌詞は、「ソビエト語」の交話的機能をよく示している。その歌には模範的なソビエト労働者であるクリム・ペトロヴィチが登場し、彼の言葉として歌詞が語られるが、彼はイスラエルの軍国主義に反対する集会で発言する際に、間違っ
て割りあてられた原稿を読み上げてしまう：「イスラエルの軍国主義は世界の
人々に周知の事実です！ 母親として、女性として、私は彼らが責任を取るこ
とを要求します！ 未亡人となって何年もたち、幸せもすべて過ぎ去りまし
た。でも私は立ち上がる決意があります。平和のために！…」。女性形で書か
れた原稿の誤りに気づいた者は聴衆の中にはおらず、発言者は喝采を浴びなが
ら演壇を降りた——これはメッセージの内容の重要性が最小限になる例であ
り、ソビエトの政治言語においては特に重要な機能を果たしていた。このよ
うな機能が発揮されるジャンルの一つにスローガンがある。スローガンは政治状
況を伝え、国民に行動を呼びかけるものとして重要であっただけではなく、コ
ミュニケーションの経路を維持しておこうとする、すなわち機会あるごとに何
らかのスローガンが出されるはずであるという大衆の期待を満足させるという
機能も同時に果たしていたのである。

「メタ言語的機能」とは注解機能であり、言葉のコードを志向する機能だが、
これも「ソビエト語」とは決して無縁ではない。はじめに触れたオーウェルの
『1984年』の中では、辞書の書き換えの達成によって「ニュースピーク」が完
成するとされる：

第11版は決定版なんだ。われわれは国語の最終的な仕上げに取り掛かって

いる。これ以外に他の言葉は使いようがないという決定的な形になるんだ。

[……] 第11版には2050年までに死語となるような言葉は一語たりとも収録されないだろう。(Orwell 1992 [1949]: 53-54)

実際には辞書の書き換えそのものによって言語が変化するのではないが、ソビエト社会の中でも新しい言葉が次々と生まれ、言葉の意味が変化し、それを説明して固定する必要性が生じたのは事実であった。実際、1920年代のある調査では、「ソビエト語」の基本語彙である「階級の敵」や「宣伝」、「陰謀」などがまだ民衆に獲得されていない様子が報告されているが（Werth 1984: 239-240、邦訳：220-221）、ソビエト初期の国家的な課題の一つは、新しい言葉を、宣伝・煽動を通して民衆に教え込んでいくことであった。そのような課題遂行のための一つの手段となったのは、本格的な辞書の編纂、出版である。そして、革命後のモスクワ言語学派を代表するウシャコフを中心として編纂された4巻本の『ロシア語紹介辞典』が1935年から40年にかけて出版された。このような辞書の言葉は「ソビエト語」の「メタ言語的機能」の代表例である。

辞書に見られる語義の定義や用例を調べることによって、国家権力がどのように語彙を定義しようとし、どのようにイデオロギー的な操作をしようとしていたかを見ることが可能であり、そのような研究のもつ意義は大きい。ピョートル・トマルキンはソビエトの辞書は「独特の宣伝・洗脳的手段に仕立てられた」とし、その編纂の際に、政権に有利な語彙を選択し、不利なものを落とすという「語彙選択」、語義の解釈に思想・政治的要素を取り入れる「意味操作」、思想・宣伝の効果を狙った用例を積極的に載せる「用例戦略」という三つの原則が見られるとする（トマルキン 1994：53-54）。同様の研究でさらに体系的で大掛かりなものとしては、上述のクーピナの『全体主義の言語：辞書と言葉の反応』（Купина 1995）があり、そこではウシャコフの辞書におけるイデオロギー的な意味操作が実例を挙げて詳しく提示される。例えば、「全体主義言語」形成の一般的な傾向としてクーピナは次のようなものを挙げている：概念レベルにおけるイデオロギーの意味的構成要素の退化、置換、変形；

人工的あるいは擬似的イデオロギー素の形成；語彙の価値論的な直線的二極分化；イデオロギー的ドグマを体系的に強化する同義・反義語群の発達；従来のロシア語に馴染みのない語彙結合をイデオロギー的規範を反映するものとしてコード化すること（Купина 1995: 15）。そして、それらのイデオロギー素が政治、哲学、宗教、倫理、芸術の各分野にいかに入り込んでいるかについて克明に記されている¹⁵。

「詩的機能」もまた政治言語と無縁ではないことは、ヤコブソンが挙げている例が《I like Ike》という政治スローガンであることを思い起こせば十分であろう。メッセージそのものに焦点を当てる「詩的機能」は「ソビエト語」のスローガンや諺、擬似フォークロア¹⁶など、そのほかのさまざまな芸術的ジャンルに特徴的に見られるものである。

このように、これまでいろいろな立場からいろいろなレベルの「ソビエト語」の研究が出されてきたが、これらはすべて本稿 3.2 で扱った物語構造を基本にした「物語の分析」の中に取り込み可能な問題であろう。しかし、ここでもう一つさらに大きな問題を考えておかなければならない。

5. 「ニュースピーク」研究を超えて

これまで、「ソビエト語」＝「ニュースピーク」という前提のもとに、その内的構造の粗描を試みた。ニュースピークの言語観の前提にあるのは、すでに述べたように、「言語決定論」と「皮下注射論」である。しかし、権力側が言葉の意味を決定して支配し、民衆がその言語を自動的に受け入れ、それによってしか思考を許されないということが厳密な意味では実際に起こりえないことは

¹⁵ 同様の手法で 1920 年代の新聞テキストを資料にロシア語の「イデオロギー素」の体系を分析したものに、クーピナの指導の下にウラル大学に提出された学位論文 Ромашов (1995) がある。

¹⁶ 「擬似フォークロア」とは伝統的なフォークロアの形式を持ちつつ、公的イデオロギーの要求に応える内容をもった言語ジャンルである。例えば、Miller (1990)、Топорков и др. (2002) などを参照。

言うまでもない。ここでわれわれは「ニュースピーク」モデルの限界を知り、「ソビエト語」研究をさらに前に進めなくてはならない。

5.1 「エルゴン」への傾斜としての「ソビエト語」

ここで特別に取り上げたいのは、ロシアの名高い児童文学者で文芸批評家であったK. チュコフスキイが1962年に著した『生きている言葉』（Чуковский 1966 [1962]）である。その中でチュコフスキイは言語の本質を、W. フンボルトが言うところの「エルゴン」（出来上がった作品としての言語）と「エネルゲイア」（活動性としての言語）の「二律背反性」に見ており、この二つの相反する本性がせめぎあう中で初めて言語は存在できるという：

あらゆる時代において標準語というものは、等しく正当で自然なこれらの相対立する志向——一方は、抑えがたい言語革新への志向であり、他方は、昔からの、試験済みで、定められた古い形式を保とうとする志向——の合力である。両者の志向が同じだけの力を発揮すれば、言語は絶対的に停滞し、動きのないものになってしまうが、あらゆる場合において革新勢力の方が保守勢力を上回るものであり、まさにそのことによって言語は正しく発達することができる。問題はすべて、バランス、規範にある——つまり、「是」と「非」の調和にあるのだ。（Чуковский 1966 [1962]: 44）

ここからはっきり見て取れるように、チュコフスキイにとっての「規範」とは、何か出来合いの「正しい型」のようなものではなく、常に運動する言語の二律背反における「バランス感覚」である。であるから、例えば一般の言語批判者がやり玉に挙げる「外来語」や「合成語・略語」、「俗語・卑語」が実は生きた言語にとって必ずしも有害なものではなく、本当の「病気」ではないということが示される。そのような「見せかけだけの病気」とは別に、「生きた」言語にとってもっと深刻な、本当の手強い「病気」が存在する——それが、第5章の終わりで彼自身の造語によって名付けられる「お役所病言葉」

(канцелярит) であり、いわゆる「ソビエト語」「ニュースピーク」のことである¹⁷。「お役所病言葉」とは、簡潔に言えば、「日常的な言葉に浸透した公式的・事務的文体」のことである。そこでは、多くの場合、書き手（話し手）はあらかじめ決められた形式に従って、ただ状況の設定を換えていくだけ、あるいは単に空欄を埋めていくだけである。チュコフスキイによれば、「お役所病言葉」（＝「ソビエト語」）の特徴は官僚文体の本質的な特徴としてのこの「定型性」であり、その「定型」にあらゆる雑多な思考が流れ込んでいく、つまりもっぱら言語のエルゴンの側のみが優勢になっていくというところにある。そして、その「定型性」は語彙からテクストレベルに至るまであらゆる言語レベルに及んでいるという¹⁸。

このように、チュコフスキイの論考の眼目は、「ソビエト語」という現象を単に個々の語彙に限定せずに、文体論的ないし語用論的観点から考察するところであり、言語の二律背反性の一方の側（エルゴン）が優勢になっていく、という点にその本質を見ることである。

チュコフスキイのこの主張とよく似た主張を言語学の言葉で述べた論文も存在する。ウクライナで1995年に開かれた「全体主義社会の言語」シンポジウムの論文集に収められたエルモレンコ（С.С. Ермоленко）の「全体主義の言語と言語の全体主義」（Ермоленко 1995）によると、「全体主義の言語」という問題を考える際には言語自体の「全体主義性」の問題を考えなければならない。言語記号には一方で「言語相対主義」ないし「言語決定論」と呼べる性質がある。つまり、言語は世界と人間の間位置し、世界の認識や意味付けの媒介をするものであり、その意味で言語はそれ自体十分に「全体主義的」である。その一方で言語は、例えば同音異義や多義性などの間で非常に揺れの大きいものであり、本質的に柔軟なものでもある（カルツェフスキイの「言語記号

¹⁷ チュコフスキイの「お役所病言葉」を「ソビエト語」（ニュースピーク）と初めて結びつけて論じたのは Романенко (1997) である。また、チュコフスキイの記述を理論的な見地から整理した拙論（高橋 2000）を参照。

¹⁸ 具体的な分析に関しては、高橋（2000）を参照。

の非対称的二重性」)。つまり、言語の記号体系は同時に全体主義的でもあれば、多元的でもあり、この両者の間で平衡を保ちながら存在しているものであるが、全体主義という言語外的な影響の下ではこのバランスが崩れ、言語の「全体主義性」の側面が優勢になるという。オーウェルのニュースピークの議論が、「言語の全体主義性」つまり言語決定論しか考慮に入れず、それを無条件に絶対視しているのに対し、チュコフスキイやエルモレンコは、言語がもつ二律背反性のバランスが崩れ、「言語の全体主義性」（エルゴン）の側が優勢になるところに、「ソビエト語」の本質を見出している。

さらにエルモレンコの議論によれば、そのように言語の「全体主義性」が優勢になった場合、記号と対象の結びつきが固定されるが、これは科学の言語とは似て非なるものである。科学の言語の場合は記号と対象の結びつきが約束事に基づいているのに対して、全体主義言語では「約束事」が忘れ去られてしまい、言語が現実にとって代わるようになる。さらに、そのような全体主義の言語によって捉えきれないものは、単に無視され、名づけられない、つまり存在しないものとされるのである。このように言語が現実にとって代わった結果、この言語と関係をもつ言説は、現実との関連で評価されるのではなく、それがどれだけ全体主義言語の内的な意味の基準に合致しているかによって評価されるようになるという¹⁹。

このような観点から「ソビエト語」の問題を考えると、単に「ニュースピーク」としての言語の内的構造を記述して終わりというものでは決してないことが分かる。本来柔軟であるはずの言語がいかに固定化されていくか、われわれは今度はそこに目を向けていかななくてはならないのだ。それには、言語と権力、言語とイデオロギーの関係についての言語内的な問題と言語外的な問題

¹⁹ 言語学の論文ではないが、これと非常に良く似た主張をしているものにエプシテイン（1997）がある。それによると、ソ連社会は指示対象を持たぬ記号同士が集まって一つの閉鎖的集団を構成し、互いが互いに言及しあっているような高度な「文学的」段階に達した記号世界だった。そこでは現実が完全に記号化されてしまい、イデオロギーそのものを除いて、他の現実など何一つ存在しなくなっていたという（エプシテイン 1997：83-84）。

の両方を検討しなければならない。

5.2 言葉のイデオロギー的使用

言葉と現実世界の間の関係は本質的に不確定であり偶発的であるのにも関わらず、もっぱら「エルゴン」の側に傾斜する言語は、その偶発的関係を必然的なものとし、普遍化し、自然化しようとする。そればかりか、さらには、言語が現実にとって代わるようになる。そのような「固定化」の作用をもつような言語使用を「イデオロギー的」と呼ぶことにしよう。言葉のイデオロギー的使用の問題は、言語学の「談話分析」の一部門である「クリティカル・ディスコース・アナリシス」(以下「CDA」)で理論化されつつある。CDAとはM. A. ハリディの機能文法を一つの母体として発展し、いわゆる「社会記号論」や「カルチュラル・スタディーズ」などとも結びついたもので、社会における権力関係を含む談話を批判的に分析する一連の談話分析研究のことである²⁰。ここでは例えば、言語の中に刷り込まれた社会権力を語彙や文法のいろいろなレベルで暴き出そうとし、動詞の名詞化や、能動態と受動態の切り替え、メタファーの使い方、前提表現、代名詞の使い方、語彙の含意など、さまざまな点に注目しながら分析が行われている。

このような「言語のイデオロギー的使用」の問題は、実のところ「ソビエト語」研究ではさほど重要視されてこなかった。個々の特殊用語がすでに目立って「イデオロギー的」であり、そもそもイデオロギーを明確に打ち出し、それを隠そうとしない言語であるために、隠れたイデオロギーを「暴き出す」ことを主目的とするCDAのアプローチ²¹にはなじみにくかったからであろう。だから、「ソビエト語」研究の多くは、「ソビエト・イデオロギー」を生み出していた「イデオロギー素」たる語彙の意味記述という形式にほぼ落ち着いてしま

²⁰ CDAの研究書は数多いが、例えば理論的な立場を包括的に語るFairclough (1989)や具体的な分析手法について分かりやすくまとめているSimpson (1993)などを参照。

²¹ CDAでは明確にイデオロギーの現れたテキストよりもむしろ表面上は穏やかに見えるテキストをこそ分析対象にすべきとされるのが一般的である。Kress (1993: 190)を参照。

うのである。しかし、あるイデオロギーがどのように言語化され、どのように「自明なもの」として「正当化」されるか、また「敵対者」がその「正当性」をいかに突き崩そうとし、そして「ソビエト語」の話者がいかにそれを防ごうとするのか——その言語的メカニズムは決して明らかにされているとは言えない²²。「ソビエト語」研究の中では、動詞から派生した名詞表現のイデオロギー性を問う Норман (1996)、Sériot (1985) などが部分的にこのような問題を扱っている数少ない研究例として挙げられるが²³、今後 CDA の視点を持った、より体系的な「ソビエト語」研究が必要であろう²⁴。

5.3 「ソビエト語」の言説空間

5.3.1 言説空間の変化

「エルゴン」への傾斜あるいは言語の「固定化」という問題を考えるときに、上のような言語内的な問題と同時に考慮すべきは、言語を取り巻く状況の問題である。言葉が固定化されるという現象は、言語内的レトリックにすべてを帰

²² ここでは「言語のイデオロギー的使用」の分析と本稿の3で扱った「ソビエト語」の内的構造の分析とを別のものとして扱っているが、当然両者が重なる部分もあり得る。例えば、ある「語彙」や「物語構造」を用いること自体がある種のイデオロギー作用を持つこともあり得るからである。例えば、Eco (1985) は、ニクソン元米大統領のウォーターゲート事件の際の弁明の演説が「赤ずきん」の構造と同じであることによって、ニクソンが「犠牲者」の立場に立つことを「自然」に見せていることを示し、また Lakoff (1991) は、湾岸戦争期の戦争容認論が、敵とわれらと犠牲者の単純な物語の構造を取ることで、人々に「自然」に受容されやすくなっているとする。また、Epstein (1995) は「ソビエト語」の論理構造を図式化した論文で、内的構造の分析の典型であるものの、「ソビエト語」が敵対者の言説を飲み込んでいく動的プロセスをも捉えることに成功しており、両者にまたがる例として挙げられる。

²³ P. Sériot はアルチュセール派の言語学者ミシェル・ペシュ (Michel Pêcheux) の弟子であり、フランスの言語学的ディスクリール分析学派を代表する一人である。この流派は上記のハリディの流れの学派とは異なるが、広い意味での CDA の学派の一つと言える。

²⁴ 「ソビエト語」研究の中で規模が大きく、体系的な研究の成果として評価の高い Купина (1995) や Вайскопф (2001) も、「言語のイデオロギー的使用」の扱いについては必ずしも自覚的ではなく、その点に限って言えば満足いくものではない。なお、拙論 (高橋 2003) は、「ソビエト語」の論理やイデオロギーの最も基本的な部分があらわれているテキストとしてスターリンと H.G. ウェルズの対談を CDA の観点から分析したものである。

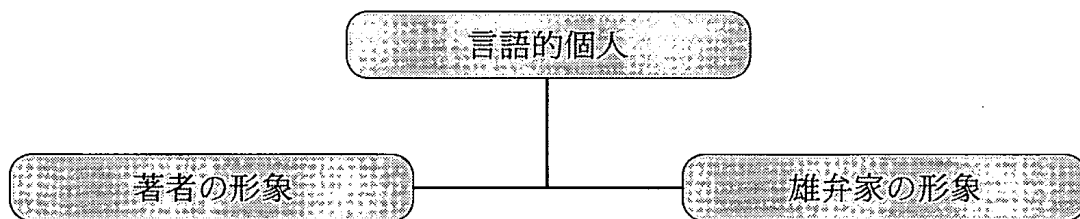
することはできず、「言語生活」全般の変化においても観察されなければならないからである。ここで本稿の2で触れた時枝誠記の言語生活論の問題に踏み込むことになる。近世末期から明治の日本語の変化について論じた時枝の議論を思い起こそう。時枝の言うように「言語史の時代区画ということは、言語の史的事実を、要素史的に扱ったのでは不可能なことであって、言語生活の体系において考察することによって、始めて可能となると同時に、政治、社会、文化との交渉も、それによって考えることができることとなるのである」(時枝 1955: 200)。時枝の見解でとりわけ重要だと思われるのは、印刷術やラジオというメディアの変化、登場による言語形態やコミュニケーション体系の変化、政治の要請などによる新しい言葉のジャンルの発達という問題が考察されている点である。1930-40年代の「ソビエト語」について考察する際も、おそらくこのような視点が重要になってくるだろう。

すでに述べたように、ソビエト初期には当局の用いる言葉が分からない民衆が多数いたのであり、国家的な言説をみなが一様に受け取るような前提はそもそも存在しなかった。つまり、大部分が文盲の農民であったロシアにおいて、民衆が革命前の局所的な言語コミュニケーションから抜け出て、国家的な神話的言説を共有し、国家的な共同体に組み込まれていくということは自動的に起こったわけではないのであり、そのような国家的な言説空間とでも呼ぶべきものが作られる過程もまた考えなければならない。ここで言う「言説空間」とは、さまざまな言説が互いに関係しあい、相互に依存しあい、ある種の体系を作り上げている空間のことである。

「ソビエト語」研究の中で、おそらく最もこのような問題に自覚的であり、理論化を試みているのは、言語学者アンドレイ・ロマネンコの『ソビエトの言語文化』(Романенко 2000)だろう。それは、言葉を実際に用いる発話主体、さらには発話の場、社会との関連などで1920-30年代のソビエトの言語文化を捉えようとしている。ロマネンコの主張をその理論的立場を中心に大まかにまとめてみよう。

ここで前提とされているのは、B.B. ヴィノグラードフの「著者の形象」論

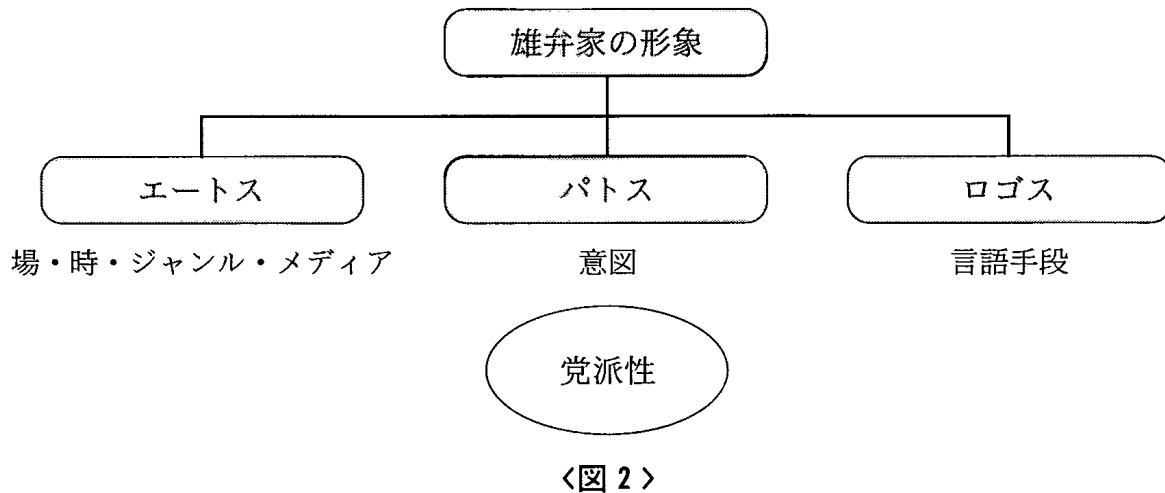
と1980年代以降のロシアの言語学で特に盛んに議論されるようになった「言語的個人」の理論である。「言語的個人」とは「外界の現実の見方（世界像）の反映あるいはある目的の達成のために体系的な言語手段がどのように用いられているかという視点から言語テキストを分析したときに、それを通して特徴づけられる言語発話者」（Караулов 1998: 671）のことであるが、それは文化・歴史的なものを背負い込んだ存在であると同時に、話者（書き手）の個人的なスタイルを併せ持っている存在である。その言語的個人の形象には「著者の形象」と呼ばれる「テキストの文学性の特徴」と、「雄弁家の形象」と呼ばれる「テキストの非文学性の特徴」の2つのタイプがある（〈図1〉）。著者の形象がそれ自体で美的な価値を持つのに対し、雄弁家の形象は意味情報が聞き手によって正確に理解されるための手段を持つだけである。言い換えれば、雄弁家の形象とは散文の言葉の社会政治的基準であり、集団的主体であり、意味的中心である。ソビエトの言語文化における「雄弁家の形象」を明らかにするのがロマネンコの目的であり、その不変的な特徴と可変的な特徴が取り上げられている。



〈図1〉

ロマネンコによれば、「雄弁家の形象」はエートス、パトス、ロゴスという三つの相において実現される。アリストテレスの用語法とは若干異なり、ここでいうエートスとは言葉が生み出されるための条件（場・時・ジャンル・コミュニケーション回路その他）であり、パトスは発話者の意図であり、ロゴスはその意図の実現に際して用いられる言語手段である（Рождественский 1997: 96）。そして、ソビエトの雄弁家の形象の全体を特徴づけているのは

「党派性」であり、それはエートスの中で意味情報の統一を可能にする条件として、パトスにおいては党派性を有するテキストの産出を意味論的に正しく行うようにする評価体系として、またロゴスにおいてはエートスの条件下でパトスの意味の実現を可能にする言語手段の体系として実現される（〈図2〉）。



ソビエトの雄弁家の形象のエートス、パトス、ロゴスのそれぞれについてのロマネンコの議論をまとめると次のようになる。エートスは「民主集中制」の原則によって組織されるが、それは単に社会における意味情報の一元化が可能となったということの意味するだけではなく、言語学的な視点から見れば、二つの言葉の種類が結合することになったということも意味する。つまり、ソビエトのエートスにおいては、言葉は（形式的にではあっても）議論を経て、大多数の承認を得た後、文書に書き留められ、受け手が受けとる。つまり、話し言葉の弁論術的な言葉と書き言葉の文書言葉の結合が社会の全ての言葉に浸透するという原則に基づいていた。パトスは「階級性」というカテゴリーに基づき、「敵一非敵」と構造化される人間の価値評価体系を作り出す。ロゴスにおいては党派性はある種の言語手段の選択として表れる。レトリック論の観点からはそれはトpos（議論の前提となる共通命題）の体系を作り上げるための手段であり、キーワード、キー概念、キーテキストなどがその典型である。

さらに、ロマネンコの議論で特に興味深いのは、1920年代、30年代の雄弁

家の形象の特徴を描き出そうとするところである。ここでその具体的な議論に触れる余裕はないが、そこで明らかにされているのは、20年代と30年代とで言語活動のエートス、パトス、ロゴスにおいても違いが見られるということであり、例えばコミュニケーション状況の違いや言語記号の組織化の原則の違い、命名の原則の違い、その他多くの点で違いが見られるという²⁵。

ニュースピーク・モデルによる「全体主義言語研究」の多くが言語の意味内容の議論と人間の思考や社会の様態の議論を直接結び付けるのに対して、ロマネンコのこの著作がそこから一歩進んでいると思われるのは、以上見てきたように、社会、文化、言葉のジャンルの問題、メディアの問題を古典修辞学の枠組みの中に取り入れながら、言葉の問題を論じている点である。また、20年代と30年代だけではあるが、「ソビエト語」を一枚岩的には見ずに、細かく時代分けをしている点も大きな進歩であるように思われる。

このロマネンコの研究の「パトス」と「ロゴス」に関しては、すでに本稿で論じてきたことと十分に重なるが、さらにそこに「エートス」という三つ目の要素を取り入れる必要性が示された。実際にはこの「エートス」はロマネンコが示しているものよりも、もっと細かく考察されるべきであろう。それを以下に考えてみたい。

5.3.2 国家的言説空間の形成²⁶

以上のような論を踏まえて、まず国家的な公的「ソビエト語」が日常生活に浸透するための社会的な前提についてまとめよう。言語学者 M. パノーフは「ソビエト社会におけるロシア語の発達について」という論文の中で、ソビエト社会におけるロシア語の発達の大きな特徴の一つはその「規範性」獲得のた

²⁵ ロマネンコがここで依拠しているのは、大きな話題を呼んだスターリン時代文化研究である В. Паперный の『文化2』(Паперный 1996 [1985]) である。それによると、ソビエトに関しては1920年代は周縁の価値が中心の価値よりも高くなる「文化1」にあたり、30年代は価値が中心へ移り、社会が凝固し、一定の形に結晶する「文化2」にあたる。

²⁶ この項は高橋(1998b)の一部に基づいたものである。

めの闘いであり、民衆レベルへの「標準語」の定着であったとする（Панов 1962: 3）。政治的統一体がその領土内である特定の言葉＝思想を全民衆に獲得させるプロセスが標準語化であり、「標準語」とは、管轄に属する者全員に対して唯一正統にして適法な言語として課せられるものである。ソビエトにおいては、革命直後からそのような標準語化への動きが急展開した。革命前のロシアでは、社会、階級、地域などによる言語的境界の壁が厚く、標準語の伝統は19世紀を通して主にインテリゲンツィアの間で細々と受け継がれていたに過ぎなかった。しかし、革命によって社会のあらゆる階層間の言語的境界が取り払われ、言語的混乱状態が生み出され、その中で規範的な「標準語」の編制が進められることになった²⁷。パノーフの論文によれば、革命前までは規範的言語を獲得する際に最も大きな役割を果たしていたのは家庭内の伝統であった。標準語の担い手であったインテリゲンツィアは社会的に閉鎖的であったために、標準語は大多数の民衆には獲得されず、その伝統は細々と伝えられていたに過ぎなかったが、革命を境に標準語を伝える手段が家庭内の伝統から「書物」へと移り、標準語の担い手に大多数の民衆が加わることになる。そして、標準語の模範とされたのは、レーニンを初めとする革命活動家たちの文章であった（*ibid.*: 4-6）。ここでパノーフが明らかにしているのは、革命を境に言語教育の権威の中心が私的な家庭から移行し、国家という公的機関によって統制される「書物＝書き言葉」となったということである。

このプロセスが完成に向かったのは1930年代のことだった。この事情については上述のロマネンコが詳しく論じている。それによると、20年代の党のレトリック活動は基本的に口頭の演説コミュニケーションの状況で行われていたのに対し、30年代のレトリック活動は書き言葉（印刷物）のコミュニケー

²⁷ ソビエト国家は多くの民族から構成され、その中でロシア語は必ずしも「国家語」として存在していたわけではなく、ここでソ連邦全体における「標準語」を一般化して論じることはいかなる。ここでは、特に「ロシア」を念頭においており、ソビエトにおける各民族と言語の問題は別の機会に譲りたい。

ションの条件下で行われ、言語活動一般を規定するのが文書となった²⁸。

口頭コミュニケーションから文書コミュニケーションへの移行に伴って、国家的な言説空間が築かれていったのだが、それを可能にした要素として重要なのは、「書き言葉の整備」、「マス・メディア制度の編制」、「受け手の形成」という三つである。

権力の言説を全国家レベルで普及させ、言語の標準化を進める上で、まず基本となるのは、書き言葉の整理である。上述の通り、ソビエト社会における規範的な標準語の基礎は書き言葉に求められる。しかし、この時期のソビエト社会には未だ文字を知らない民衆が多く、またいわばバイリンガルあるいはマルチリンガルな状態であり、権力の発する言葉を理解できない民衆が多かった。そのような状況の中でロシア語の書き言葉を標準化しようという志向がソビエト政権の中で強くなったが、その標準化の基礎を作り上げる上で大きな役割を果たしたのが「言語学」である。規範語を定着させるには、文字言語による客観化とコード化（法典化）が必要だからである。

ソビエト国家形成期のロシアの言語学には、標準語整備の要請に応えるだけの十分な備えが既になされていた。ボードアン・ド・クルトネやフィリップ・フォルトゥナートフなど、当時のロシアを代表する言語学者が革命期に先立って音韻論の基礎を固め、体系的な言語研究の道を開いていたほか、ロシア語の方言研究の蓄積もあり、標準語の規範の定立のための基礎がすでに築かれていた。ここでこの時代のロシア語学全体について素描するだけの余裕がないため、ここでは「標準語」の定立と関わるものとして「正書法改正」と「辞書の編纂」という二つの大きな事業が行われたことを指摘するにとどめよう²⁹。

²⁸ Романенко (2000: 42-47) を参照。また、1920年代と30年代の違いをレーニンとスターリンの違いに見ているギュンターの指摘も興味深い：「生前のレーニンは雄弁家、煽動家、演説家であり、燃え上がる演説で知性と心に火をつけるのだが、一方のスターリンは『書の主』である。前者に特有なのは口頭のレトリックの特徴であり、後者に特有なのは書き言葉の特徴である」(Гюнтер 2000: 763)。

²⁹ より詳しくは Smith (1991) などを参照されたい。

次に、そのように整備された言葉によって形成される公的な言説を全民衆に伝達するシステムについて考えることにしよう。そのシステムとは、ソビエト時代に国家の最重要課題の一つとして大々的に展開されたプロパガンダ活動によって整備されたものである。

このようなソビエトの宣伝活動は、ロシア革命以前に存在した他のいかなる国家の政治活動家たちのそれともその規模が違っていた。ソビエトのプロパガンダ活動を他国の活動から際立たせているのは、そこには新しい人間を作るという人間改造の包括的な思想と情熱が内包されていたということである。ソビエト体制は、党や政府が要求する方向へ民衆を総動員するという目標に向かった世界最大規模のプロパガンダ組織を発展させた。そして、このようなプロパガンダ活動の組織化がとりもなおさず公的言説の伝達機構の組織化となる。

プロパガンダは、歴史的にもともと活字印刷の登場の直接の反応として出現したものであるように、プロパガンダ活動の整備の際に必然的に組織化しなくてはならないのがマス・メディア機構であると言える。その意味で、ロシアの革命勢力が1917年の10月革命直後に、敵対する側の新聞を直ちに停止したのはまさに象徴的な出来事であった。その後も、革命政権はコミュニケーション・メディアを完全に統制するために、1920年頃、全ソ連邦共産党中央委員会宣伝煽動部を設置し、それは1921年11月の特令によって正式のものとなった。この部の任務は、党や政府の決定を民衆に伝え、それを説明し、それに対する一般的な支持を獲得し、その遂行を確実にするために民衆を動員することである。こうして、宣伝・煽動の領域におけるあらゆる党活動がこの機関によって一元的に統一され、指導されることになる。

では、ソビエトのプロパガンダはどのようなメディアを通してなされたのだろうか。『ソビエト大百科辞典』の定義によれば、「プロパガンダ」の手段としては「定期刊行物（新聞・雑誌）、ラジオ放送、講義、政治文献、学術文献、通俗科学書、文学作品、演劇、映画」³⁰があり、「アジテーション」の手段とし

³⁰ Большая Советская Энциклопедия. 3-е изд. Том 35, с. 70.

ては「印刷物（新聞・パンフレット・ビラ・アピールなど）、口頭演説（報告・討論会・新聞の朗読など）、ラジオ、映画、造形芸術（ポスター・図表・カリカチュアなど）」³¹がある。つまり、生活の全ての側面がプロパガンダ・アジテーションの手段として用いられていたのである。

このようなプロパガンダ・アジテーションの手段、例えば新聞という近代的なマス・メディアが成立し、機能するためには、実際に活字印刷された新聞を読むことのできる人々、つまり「読者」の存在が必要である。しかし、当時のロシアは非常に識字率の低い国であった。1897年には、9歳以上の男女全体の識字率は24%にすぎなく³²、農村部に限れば、それは限りなくゼロに近かった。レーニンはこのようなロシアの後進性をよく理解しており、国家全体の文化レベルの向上に大きな関心を払っていた。ボリシェビキが政権についた後、その権力の維持のためには国家の大多数を占める農民を取り込んでいかななくてはならないが、その際最大の障害になるのが「文盲」であり、レーニンも政治教育局員が直面する主要な三つの「敵」の一つとして「文盲」を挙げているほどである（Ленин 1964: 174）。このように、初期ソビエトにとって「文盲撲滅運動」は最重要課題の一つであったが、ではそれはどのように進展したのだろうか。ここでは具体的な歴史を見るのが目的ではないので、ごく大雑把な流れを示すだけにとどめよう。

文盲撲滅のための運動は文字通り革命直後から始まっている。その任務にあっていたのは教育人民委員部であり、その中でとくにルナチャルスキーと、ナデジュダ・クループスカヤが責任を任されていた。1919年12月26日に人民委員会議が文盲に関する命令を出し、それによって、教育人民委員部は教育コースを作って地方を回り、文盲撲滅拠点を組織していく。この時代の初め、最も識字教育が成果を挙げたのは赤軍においてであり、最初の教科書も兵士向けに作られたが、その後教育人民委員部は精力的に一般の農民向けの教科書も

³¹ Большая Советская Энциклопедия. 3-е изд. Том 1, с. 295.

³² Большая Советская Энциклопедия. 3-е изд. Том 12, с. 434.

作るようになっていく。そして、1920年に文盲撲滅非常委員会が設立されることによってこの運動は拡大し、大きな発展を遂げることになる。ボリシェビキ政権が内戦に勝利すると、文盲撲滅の問題はさらに現実のものとして重要性を増してくる。レーニンはとりわけ文化を具体的な国家建設と結び付けて考え、文化の前提条件としての識字の教育の必要性をことあるごとに訴えていた。さらに、ボリシェビキは1923年9月2日に任意団体「文盲追放」を設立し、政府の全面的な支援の下、1924年以降全国至る所にこの団体の組織を作っていた。

このような文字教育を通して、人々は不特定多数の「マス・オーディエンス」へと変質していくが、このプロセスは印刷術の登場によるメディア変容のプロセスであり、「声の文化」から「文字の文化」への移行という、近代国家がほとんど例外なく経験したものと本質的には変わるところはない。商品化され、機械化された本や新聞の生産が「国家的なもの」を想像可能にし、国民意識を作り上げる上で決定的な役割を果たしたとするベネディクト・アンダーソンの議論³³を持ち出すまでもなく、新聞その他のマス・メディアの普及によって、一つの国で様々な方言を話す大衆同士が初めて共通の印刷・出版用の言語を通じて理解しあうことができただけでなく、共通の言語のもとで統一されていることを実感できたのである。

これにある程度似たプロセスはロシアでは革命以前から始まってはいる。例えば、教会スラブ語にかわって土着のロシア語が書き言葉としての地位を獲得し、整理されたのは19世紀前半である。しかし、印刷・出版が全民衆規模で普及し、国家の言語が定着し始めるのは少なくとも革命以後であった。言い換えれば、新聞というマス・メディアを通じて権力の言説が全民衆レベルで獲得

³³ アンダーソンの論は民族的紐帯を基礎とした「国民国家」(nation-state)に関するものであり、国民国家の議論をソビエト国家にそのまま適用することはできない。しかし、自分が直接知ることのできる土着の共同体を超え出た空間を想像し、水平的な同士愛によって相互に繋がりあうようになるというプロセスを「国民化」と考えれば、ここで論じているソビエトの現象もアンダーソンの議論と深く関わってくると考えられる。Anderson (1983) を参照。

され、その言葉によって国が強固に一つにまとまるための技術的な条件（＝全民衆レベルの新聞の登場）が革命後に初めて整備され、中央の権力と大衆の、つまり一対多のマス・メディア的な情報ネットワークがもたらされるようになったのである。このような条件が整って初めて言説による国家のイデオロギー支配が可能になったと言える。

当時の新聞をめぐるコミュニケーションの重要な要素として「労農通信員」を中心とした一般民衆による「投書」活動も忘れてはならない。ソビエト政権は民衆が新聞に投書するという運動をとりわけ熱心に奨励していたが³⁴、この労農通信は「読者の形成」において非常に重要なファクターである。この運動はとりもなおさず新聞という国家の公的な言説の場に民衆を直接的に参加させることを意味する。つまり民衆が国家の新聞に「投書」することによって、国家と民衆が言説の場を共有し、両者が（ある程度）共同で言説を発信し、国家と民衆の間の政治的な同一性がそこで生み出されるようになるのである。もちろん、投書の採用・不採用を決定するのは完全に新聞の側にあり、完全な意味での共同製作ではないが、しかし、民衆の投書が新聞という公的な言説の一部を担っていたことに変わりはない。

5.3.3 「ソビエト語」の言説空間のモデル

以上のようなプロセスを経て、では実際にどのような「言説空間」が築き上げられていたと考えるべきだろうか。ここで言う「言説空間」とは、さまざまな言説が互いに関係しあい、相互に依存しあい、ある種の体系を作り上げている空間のことであり、これまでの「ソビエト語」研究の中で最も欠けていた点がまさにこの諸言説の体系という視点であった³⁵。では、具体的にどのような言説空間が形成されたのか、1930年代後半のスターリン時代を例にとって考えてみたい。

³⁴ Inkeles (1951)などを参照。

³⁵ 「ソビエト語」についての諸研究を理論的に整理した拙論（高橋 2002b）を参照のこと。

スターリン時代は「ソビエト語」が最も広範なジャンルに浸透した時代であり (Вайсс 2000: 539)、そのすべてを記述することは不可能に近いが、その簡単な分類の仕方を考えてみよう。例えば、「文字」のジャンルと「声」のジャンルという分類、インターパーソナルなジャンルとマス・メディアのジャンルという分類などさまざまな分類法があり得るが、「ソビエト語」の「言説空間」という体系を考える上では、まずはソビエト社会のコミュニケーション体系がスターリンの言葉を頂点とするヒエラルキー構造をなしていたという視点 (Романенко 2000: 28-31) による分類が上位にくるべきだろう。

スターリンの言葉は「ソビエト語」の言説空間における「参照テキスト」として存在する。しかし、この「参照テキスト」に関してはいくつかの確認が必要だろう。本稿で「参照テキスト」と言うとき、スターリンの言葉が始めにあって、それに対する直接的な反応として他のテキストが生み出されたという場合のみを念頭に置いているのではない。つまり他のテキストが生み出される際の参照枠としてのみ「参照テキスト」を考えているのではない。スターリンの言葉はそれ自体に価値があるために、それが発せられ、メディアで広められた瞬間から「言説空間」の根本的な性質を変えてしまうと考えられる。それは、スターリンの言葉とはまったく異なる文脈から生み出されたテキストであっても、スターリンの「参照テキスト」が登場した後では、必ずそれとの関連において受容されざるを得なくなるということである。この点に関してはもう少し議論が必要だろう。

例えば、「幸福」や「楽しさ」が盛んに称えられ、それが時代のキーワードとなる 1930 年代のソビエト文化に関して次のような指摘がある：

幸福と笑いに満ち溢れるのは歌だけではなく、叙情詩や評論、映画などもそうだった。スターリンの「暮らしがより良くなった、同志たちよ。暮らしがより楽しくなった」という表現が知られるようになった。もしかしたら、これらすべての陽気な歌は [スターリンの] 新しいスローガンへの応答に過ぎなかったのだろうか。もちろん、何らかのスローガンを増幅するだけの歌も

あった。しかし、この叙情の波の最初に現れたのがスターリンの「幸福に関する法令」ではなかったことを考えるべきだろう。[……] これらすべてのことは、大衆歌が社会心理の深い層から生まれてくるということを物語っている。ソビエト文化が、ただイデオロギー的スローガンのみに基づいて発展していたと考えるのは無邪気に過ぎる。スターリンの言明は、むしろすでに現れていた機運を表明するものであり、強めるものなのだ。（Гюнтер 2000: 772）（下線は引用者）

「幸福」を歌った 1930 年代の多くの歌は、スターリンが演説の中で宣言した「暮らしがより良くなった、より楽しくなった」というスローガンへの直接の応答として生み出されたのではなく、それとは関係なく時代の全体的な精神の中から生み出されたのだ、というこの主張は正しい。しかしこの主張は、スターリンの言葉が「参照テキスト」であるという本稿の主張と必ずしも矛盾するものではない。確かに、多くの歌はスターリンのスローガンへの直接的な反応として作られたものではなく、それよりも前に別の文脈から生まれたものであろう。しかし、スターリンのスローガンが広く知られるようになった後は、もうこれらの歌は以前と同じようには歌われない。漠然とした「時代精神」に絶大な権力をもって形を与え、新たな「課題」として提示するのがスターリンを初めとする指導者の言葉の「参照テキスト」としての役割であり、そしてそのようにスターリンが「幸福だ」と宣言した後は、そのスターリンのテキストが「参照テキスト」として機能し始めるために、「幸福」の歌はその「参照テキスト」を反復し、補強しながら再生産していく役割を必然的に持つてしまう。それが「ソビエト語」の言説空間の仕組みなのである。

このように、「参照テキスト」を補強し、それに「応答」するような語りがさまざまなメディアを通していろいろなジャンルで展開され、民衆に浴びせかけられる。例えば、「参照テキスト」をさらに具体的に詳細に展開する物語を生産していくジャンルがある。それは毎日のように報道される「ジャーナリズムの言語」や、あるいは学習過程で教え込まれる「教科書」、そして巧みな文

章で芸術的に展開される「文学作品」その他である。

また、「参照テキスト」を「定式化」するようなジャンルもある。例えば、簡潔な表現の中に、時に詩的言語の形式をとりながら凝縮して定式化する「スローガン」というジャンル。あるいは書物の形でまとめられ、全国民が「聖典」として勉強し、身につけさせられた『スターリン憲法』や『共産党史小教程』、『スターリン小伝』などもある。こうして、一つの「テーマ」はさまざまなジャンルによってさまざまに展開され、日常的な場面に浸透していく。

そして、これらの「上から」のジャンルと並んで「下から」の発話のジャンルも重要である。人々は例えば集会での発言、また新聞・雑誌への「投書」という作業を通して、みずからが国家的な言説の発信者となっていくのであるし、あるいは「自己批判」という作業を通して国家的な「ソビエト語」を身につけていくのである。

重要なのは、すでに述べたように、これらのジャンルが互いに独立して存在していたのではなく、相互に関係しあい、システムとしての「言説空間」を作り上げていたことである。それは、ある「テーマ」を中心に、それぞれの言説群がさまざまな機能を持ちながら、互いに参照しあい、相互に引用しあい、支持しあいながら展開して作り上げていた空間である。それぞれのジャンルを個別に取り上げた研究は多々あるが、それらは必ずしも言説空間というシステムの中でのそれぞれの役割が考慮に入れられたものではなかった。

一方、このような具体的な場における言説の分析は、現在のところ主として「社会史研究」の分野で行われている。例えば、スターリン時代の「祝祭の言説」を扱う Petrone (2000) は、言説をジェンダー、民族性、歴史、文化、英雄というカテゴリーに分けて分析し、例えば第3章「母国を想像すること」では、ソビエト当局が地理的・思想的に「調和の取れた平等な社会」をいかに人々に「想像させることができたのか」、つまり〈想像の共同体〉(B. アンダーソン)をいかに成立させたのかを、1930年代の極地探検の英雄やアメリカへの無着陸飛行を達成した英雄たちをめぐる言説を通して分析している。しかし、これらの研究は基本的には語られた内容の分析であり、必ずしも言語の

さまざまな働きに目を向けたものではなく、それぞれのジャンルの言語的特徴などが考慮に入れられたものでもない。言語理論に基づいた体系的な言説の分析が求められるところである。

4. さいごに

これまで「ニュースピーク」としての「ソビエト語」の内的構造の粗描、言語のイデオロギー的使用の問題、そして国家的言説空間の形成、その中で展開される言説の分析まで多岐にわたって問題を整理して論じてきた。では、これらすべてを見据えた包括的な研究はどのようにしたら可能となるのだろうか。ここで、そのアプローチの一つを提示して、本稿を終えることにしよう。それは、社会史研究における言説分析のように、ある具体的なテーマにおける言説を取り上げ、その中の基本的な構造を明らかにした上で、それが言説空間の中でどのように互いに関わるかを考慮に入れながら、そのテーマがさまざまなテキスト・タイプ（ジャンル）を通してどのように展開していくかを、ジャンルの言語的特徴、言語のイデオロギー的使用などにも目を向けつつ、できるだけ具体的に追ってみることである³⁶。そのような分析の積み重ねによって、従来の研究で得られた知見が生かされつつ、かつそれぞれの時代の「ソビエト語」の全体像が多少なりとも明らかになるように思われる。

参考文献

Алтунян, А.Г. (1999) Лозунг в политическом дискурсе // От Булгарина до Жириновского: Идеино-стилистический анализ политических текстов. М.: РГГУ. С. 173-183.

³⁶ 拙論（高橋 2002a、Такахаси 2003）は、このような問題意識に基づいて、ごく部分的な分析ではあるが、あるテーマが言説空間に展開される様子をまとめたものである。

- Архипов, И.* (1997) Опыт интерпретации одной речи И.В. Сталина // Текст в гуманитарном знании. Материалы межвузовской научной конференции 22–24 апреля 1997 г. М.: РГГУ. С. 328–337.
- Басовская, Е.Н.* (1995) Художественный вымысел Оруэлла и реальный советский язык // Русская речь. № 4, с. 34–43.
- Вайскопф, М.* (2001) Писатель Сталин. М.: Новое литературное обозрение.
- Вайсс, Д.* (2000) «Новояз» как историческое явление // Х. Гюнтер и Е. Добренко (ред.) Соцреалистический канон. СПб.: Гуманитарное агентство «Академический проспект». С. 539–555.
- Вежбицкая, А.* (1993) Антитоталитарный язык в Польше: механизмы языковой самообороны // Вопросы языкознания, № 4, с. 107–125.
- Геллер, М.* (1994) Машина и винтики: История формирования советского человека. М.: Изд-во «МИК». (邦訳: ミシェル・エレル 『ホモ・ソビエティクス: 機械と歯車』 辻由美訳、白水社、1988 年)
- Глебкин, В.В.* (1998) Ритуал в советской культуре. М.: «Янус-К».
- Гловиньский, М.* (1996) «Не пускать прошлого на самотек». «Краткий курс ВКП(б)» как мифическое сказание // Новое литературное обозрение. № 22, с. 142–160.
- Гюнтер, Х.* (1991) «Сталинские соколы» (Анализ мифа 30-х годов) // Вопросы литературы. № 11–12, с. 122–141.
- Гюнтер, Х.* (2000) Архетипы советской культуры // Х. Гюнтер и Е. Добренко (ред.) Соцреалистический канон. СПб.: Гуманитарное агентство «Академический проспект». С. 743–784.
- Ермоленко, С.С.* (1995) Язык тоталитаризма и тоталитаризм языка // Г. М. Яворьска (ред.) Мова тоталитарного суспільства. Киев. С. 7–15.
- Земцов, И.* (1985) Советский политический язык. London.
- Караулов, Ю.Н.* (1998) Языковая личность // Ю.Н. Караулов (ред.) Русский язык: энциклопедия. 2-е изд. М.: Дрофа. С. 671

- Кларк, К. (2000) Сталинский миф о «Великой семье» // Х. Гюнтер и Е. Добренко (ред.) Соцреалистический канон. СПб: Гуманитарное агентство «Академический проспект». С. 785–796.
- Кронгауз, М.А. (1994) Бессилие языка в эпоху зрелого социализма // Знак: Сборник статей по лингвистике, семиотике и поэтике. М. С. 233–244.
- Кронгауз, М.А. (1995) Как вас теперь называть? // Г.М. Яворьска (ред.) Мова тоталитарного суспільства. Киев. С. 54–60.
- Кронгауз, М.А. (1996) Советский антисоветский юмор. О Довлатове // The Moscow Linguistic Journal, No. 2, с. 227–239.
- Купина, Н.А. (1995) Тоталитарный язык: словарь и речевые реакции. Екатеринбург-Пермь: Изд-во Уральского университета.
- Купина, Н.А. (1999) Языковое сопротивление в контексте тоталитарной культуры. Екатеринбург: Изд-во Уральского унив.
- Левин, Ю.И. (1998) Семиотика советских лозунгов // Избранные труды: Поэтика, семиотика. М.: Языки русской культуры. С. 542–556.
- Левонтина, И.Б. (1995) Слова-свидетели // Г.М. Яворьска (ред.) Мова тоталитарного суспільства. Киев. С. 93–99.
- Ленин, В.И. (1964) Полное собрание сочинений. 5-е изд. Том 44. М.: Госполитиздат.
- Михеев, А.В. (1991) Язык тоталитарного общества // Вестник АН СССР, № 8, с. 130–137.
- Мокиенко, В.М. и Никитина, Т.Г. (1998) Толковый словарь языка Совдепии. СПб.: Фолио-Пресс.
- Норман, Б.Ю. (1996) Отглагольные существительные как средство языковой манипуляции в текстах тоталитарного общества // Т. Шамрай (ред.) Езыкът на тоталитарното и посттоталитарното общество. София: Издателство Прохазка и Качармазов. С. 88–93.

- Панов, М.В.* (1962) О развитии русского языка в советском обществе // Вопросы языкознания. 1962, № 3, с. 3–16.
- Паперный, В.* (1996 [1985]) *Культура «Два»*. М.: НЛО.
- Радзиевская, Т.В.* (1996) О некоторых особенностях текстообразования в советский период // Т. Шамрай (ред.) *Езикът на тоталитарното и посттоталитарното общество*. София: Издателство Прохазка и Качармазов. С. 48–55.
- Рождественский, Ю.В.* (1997) *Теория риторики*. М.: Добросвет.
- Розина, Р.И.* (1991) Корифей пропаганды, или риторика Сталина // *Наука убеждать: Риторика*, № 8, с. 39–47.
- Розина, Р.И.* (1996) Глаголы тоталитарного имущественного права: конфисковать, реквизировать и изъять // Т. Шамрай (ред.) *Езикът на тоталитарното и посттоталитарното общество*. София: Издателство Прохазка и Качармазов. С. 94–99.
- Романенко, А.П.* (1997) Канцелярит: риторический аспект (О книге К.И. Чуковского «Живой как жизнь») // *Риторика*, № 1 (4), 95–102.
- Романенко, А.П.* (2000) *Советская словесная культура: образ ратора*. Саратов: Изд-во Саратовского университета.
- Ромашов, Н.Н.* (1995) Система идеологем русского тоталитарного языка по данным газетных демагогических текстов первых послереволюционных лет. Автореф. канд. дис. Екатеринбург, 1995.
- Сарнов, Б.* (2002) *Наш советский новояз: маленькая энциклопедия реального социализма*. М.: Изд-во «Материк».
- Такахаси, К.* (2003) К поэтике сталинизма 1930-х годов: Опыт дискурсивного анализа одной речи Сталина // *Московский лингвистический журнал*. № 7–2. С. 101–124.
- Топорков и др.* (ред.) (2002) *Рукописи, которых не было: Подделки в области славянского фольклора*. М.: «Ладомир»

- Чуковский, К.И. (1966 [1962]) Живой как жизнь // Собрание сочинений в 6-ти томах. Том 3ю М.: Художественная литература.
- Шустов, А.Н. (1992) Враг народа // Русская речь. 1992. № 5. С. 112–117.
- Anderson, B. (1983) *Imagined Communities: reflections on the origin and spread of nationalism*. London: Verso.
- Clark, K. (1985) *The Soviet Novel: History as Ritual*. Chicago: Chicago UP.
- Eco, U. (1985) Strategies of Lying, in M. Blonsky (ed.) *On Signs*, London. Pp. 3–11.
- Epstein, M. (1995) Relativistic Patterns in Totalitarian Thinking: an Inquiry into the Language of Soviet Ideology. In *After the Future: The Paradoxes of Postmodernism and Contemporary Russian Culture (Critical Perspectives on Modern Culture)*. Amherst: Univ. of Massachusetts Press. Pp. 101–163.
- Fairclough, N. (1989) *Language and Power*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Hodgkinson, H. (1954) *The Language of Communism (A timely glossary brilliantly exposing the communist distortion of language)*. NY: Pitman Publishing Corporation.
- Hunt, L. (1984) *Politics, Culture, and Class in the French Revolution*. Berkeley: Univ. of California Press.
- Inkeles, A. (1951) *Public Opinion in Soviet Russia: A Study in Mass Persuasion*. Cambridge: Cambridge UP.
- Jakobson, R. (1964 [1960]) Closing statement: Linguistics and Poetics, in T. A. Sebeok (ed.) *Style in Language*, Cambridge, Massachusetts: The M. I.T. Press. Pp. 350–377.
- Kress, G. (1993) Against arbitrariness: the social production of the signs as a foundational issue in critical discourse analysis. *Discourse and Society*.

No. 4-2, pp. 169-191.

Lakoff, G. (1991) *Metaphor and War: The Metaphor System Used to Justify War in the Gulf*. (A paper presented on January 30, 1991 to an audience at Alumni House on the campus of the University of California at Berkeley)

Lakoff, R. (1975) *Language and Woman's Place*. NY: Harper & Row.

Leech, G. (1974) *Semantics*. Harmondsworth: Penguin.

McCannon, J. (1998) *Red Arctic: Polar Exploration and the Myth of the North in the Soviet Union, 1932-1939*. New York: Oxford U.P. 1998.

Miller, F.J. (1990) *Folklore for Stalin: Russian Folklore and Pseudofolklore of the Stalin Era*. Armonk. NY: M.E. Sharpe.

Orwell, G. (1992 [1949]) *Nineteen Eighty-Four*. Everyman's Library.

Petrone K. (2000) *Life Has Become More Joyous, Comrades: Celebrations in the Time of Stalin*. Bloomington & Indianapolis: Indiana U.P.

Sériot, P. (1985) *Analyse du discours politique soviétique*. Paris.

Sinyavsky, A. (1990) *The Soviet Language*. In *Soviet Civilization: A cultural history*. NY: Arcade Publishing. Pp. 190-225.

Simpson, P. (1993) *Language, Ideology and Point of View*. London.

Smith, M.G. (1991) *Soviet Language Frontiers: The Structural Method in Early Language Reforms 1917-1937*. (A Dissertation submitted to the Faculty of the Graduate School of Georgetown Univ.)

Werth, N. (1984) *La vie quotidienne des paysans russes de la révolution à la collectivisation (1917-1939)*. Paris, Hachette. (N. ワース 『ロシア農民生活誌：1917-1939 年』 荒田洋訳、平凡社、1985 年)

Young J.W. (1991) *Totalitarian Language: Orwell's Newspeak and Its Nazi and Communist Antecedents*. London: U.P. of Virginia.

ヴァインリヒ、ハラルト (1973) 『うその言語学 —— 言語は思考をかくす事ができるか』 井口省吾訳注、大修館書店

- エプシテイン、ミハイル（1997）「ポストモダニズムとコミュニズム」望月哲男訳／『現代思想』No. 25-4、80-102 頁
- クレムペラー、ヴィクトール（1974）『第三帝国の言語〈LTI〉——ある言語学者のノート』羽田洋他訳、法政大学出版局
- 高橋健一郎（1998a）「ソビエト国家の「闘争の物語」の生成レトリック——1920年代『プラウダ』紙のメーデーの社説の言説分析」／日本記号学会編『聲・響き・記号（記号学研究18）』東海大学出版会、1998年、169-179 頁
- 高橋健一郎（1998b）「革命後ロシアにおける全国家的言説共同体の形成について」／東京大学言語情報科学研究会『言語情報科学研究』第3号、1998年、99-119 頁
- 高橋健一郎（2000）「イデオロギー批判としての言語分析：あるいは〈ソビエト語〉作文小教程——K. チュコフスキイ『生きている言葉』の言語学的読みの試み——」／東京大学言語態分析研究会『言語態』2000年、41-52 頁
- 高橋健一郎（2001）「ソビエトスローガンの詩学」／東京大学 DESK 編『ヨーロッパ研究』第1号、99-118 頁
- 高橋健一郎（2002a）「ソビエトの政治言説——ソビエト・ロシアにおける「大祖国戦争」期の公的言説の詩学」／『シリーズ言語態』第5巻「社会の言語態」、東京大学出版会、2002年、37-58 頁
- 高橋健一郎（2002b）「ソビエト全体主義社会の言語に関する社会言語学的研究」／社会言語科学会『社会言語科学』Vol. 4-2、2002年、42-56 頁
- 高橋健一郎（2003）「イデオロギー闘争としてのコミュニケーション：スターリンと H.G. ウェルズの対談におけるイデオロギーと語りの戦略」／社会言語科学会『社会言語科学』Vol. 6-1、40-51 頁
- 田中克彦（2000）『「スターリン言語学」精読』、岩波書店
- タルド、ガブリエル（1924）『模倣の法則』風早八十二訳、而立社
- 時枝誠記（1955）『國語學原論 續篇——言語過程説の成立とその展開——』

岩波書店

時枝誠記 (1976 [1950]) 「スターリン『言語學におけるマルクス主義』に關して」／『言語生活論』岩波書店、219-231 頁

トマルキン、ピョートル (1994) 「ソ連語よさらば」／『窓』 9、ナウカ、28-37 頁

沼野充義 (1996) 「『文化としてのスターリン時代』へ」／『思想』 4、163-180 頁